見抜けなかった画像盗用と不正加工

星ナビ編集人：川口雅也＋編集部スタッフ一同

「星ナビ」2008年6月号と2009年10月号の表紙画像が、チェコ共和国ブルノ工業大学機械工学部数学研究所のミロスラフ・ドルクミューラー（MiloslavDruckmüller）さんがWebページで公開している画像を、宮城隆史氏が盗用し、不正な加工を行ったものだったことに端を発した一連の画像盗用問題の経緯を、2009年11月号、および12月号に掲載しました。

宮城氏の画像盗用は、皆既日食、皆既月食、部分月食、水星の太陽面通過などイベント性のあるものが多く、C/2006P1マックノート彗星、17P/ホームズ彗星といった大きな話題となった彗星も含まれています。これまでの調査で、元画像が特定できたり、明らかに盗用であると判断されたものは、アストロアーツ関連の出版物だけで別表のとおり19点あります。同じ盗用画像が「星ナビ」や「星空年鑑」などに掲載されているケースもあるので、件数は22件となります。宮城氏はこの他にも、天文関連雑誌や会報、カメラ関連雑誌、日食観測ツアーのパンフレット、自治体のPR誌、新聞など複数のメディアやWebページに盗用した画像を発表していたことがわかっています。星ナビ編集部ではそのすべてを子細に把握しているわけではありませんが、おそらく総数は50件ほど、もしくはそれ以上になると推測されます。

ネット上で盗用元画像を取得

一連の盗用疑惑の説明を求めるために宮城氏に来社を要請したことは、2009年12月号で報告しました。この時に事情を聞いたことをもとに検証した限りでは、宮城氏がインターネット上の画像をダウンロードして不正に加工し、自らの作品だと称して発表し始めたのは、2006年11月9日に起こった水星の太陽面通過からです。宮城氏によると、「（盗用に及んだのは）和歌山県で撮影したが、雲が多く、よい写真が得られなかった」からで、自身が撮影した2004年6月8日の金星の太陽面通過と並べる形で「星ナビ」2007年1月号に投稿しています。その後、太陽面を水星が通過するようすを連続合成したように加工しています（「星ナビ」2007年12月号の付録「星空カレンダー2008」掲載）。

2007年1月に南半球で壮大な尾を見せたC/2006P1マックノート彗星では、実際には自宅に居ながら、沖縄県の渡嘉敷島やオーストラリアのパース近辺に遠征したかのように装い、多数の画像を多方面に発表しました。海外のWebサイトからダウンロードした画像のスカイラインをコラージュによって改変したり、雲や地上景色を改竄することで違った印象になる画像を作成しています。また、夕景の背景を広げたり、星空の背景を描き加えたりすることで、一見すると別の画像に見えるような加工を施した例もありました。

2007年10月24日に突然大バーストした17P/ホームズ彗星では、元画像にあったクレジット表記などをスタンプツールやコピー＆ペーストで塗りつぶしています。

月食関連は、2007年8月28日の皆既月食と、2008年8月17日の深い部分月食の2件です。月食は満月が見えている夜の側ならば、地球上どこからでも同じように見ることができます。しかし、月は地球に比較的近いので、見る場所が大きく違えば若干ながら視差が生じます。トリミングや色調を調整してオリジナルを改変しても、視差が動かぬ証拠となります。2件の月食の盗用元は、アメリカとギリシャでした。

いったん強い猜疑の目を持って、これらの画像を見ていけば、撮影データや画像の矛盾点、不正な改竄の痕跡に気がついたはずです。水星の太陽面通過の過程を示した画像は、水星の黒い点がわずかに蛇行しているし、水星の同じシルエット像が連続して貼り込まれていました。一連のマックノート彗星の盗用に最初に気がついた画像（2007年3月号20ページ下）は、月と金星の位置関係からオーストラリアのパース近郊ではなく、インド洋を隔てた南アフリカで撮られたものだと判断できました。皆既月食は他の日本で撮られた画像と比べることで、視差があることがわかりました。

盗用元になったのは、水星の太陽面通過のみが国内で、アストロアーツの画像投稿ギャラリーに発表されたものでした。他は海外のWebページからで、オンライン写真共有サービスのFlickrや、アメリカの天文雑誌『Sky&Telescope』誌がWeb上で運営しているPhotoGallery、spaceweather.com、個人が開設したWebページなど多岐にわたっています。画像共有サイトなどで関連語句を打ち込んで検索をかけたり、カテゴリー分けされたサムネイル画像をチェックしていくと疑わしい画像が見つかりました。

「星ナビ」2007年3月号20ページに掲載した、マックノート彗星。宮城氏は2007年1月20日20時38分にオーストラリアのパース南部で撮影したとしていたが、月と金星の位置関係から南アフリカで撮られたものと判明した。

皆既日食画像の不実

皆既日食の場合は、盗用画像を斜めにトリミングして回転させたり、他の画像とコンポジットすることで違った印象になるように操作しています。また、色調やコントラストを改竄して印象を変えた画像もあります。しかし、コロナの画像処理は作者によって独自のプロセスを経て得られたものが多く、オリジナルの特徴が色濃く残ってしまうことから、いったん盗用元画像が知れてしまえば、それを同定することは容易です。

日食関連の画像盗用は、2006年3月29日、2008年8月1日、2009年7月22日に起こった皆既日食の3回に及んでいます。

2006年3月29日の皆既日食時には、リビアのエクリプスシティに遠征しています。当日は快晴で「銀塩フィルムとデジタル一眼レフにて、多くの画像処理用元画像を得た」ということでした。実際、露出の違うコマを並べた写真を「星ナビ」2006年6月号に投稿しています。2008年6月号の表紙に採用したこの時のコロナ画像は、実際には2009年10月号の表紙と同じドルクミューラー氏らによるものでしたが、発表当初、宮城氏は「コロナの画像処理の試行錯誤に2年かかった」としていました。また、この時からそれまでの下地姓から宮城姓に改めています。宮城氏は「両親の離婚のため」と説明していました。

2008年8月1日には、中国の新疆ウイグル自治区三糖湖に出向いたものの、皆既時に雲がかかり快晴下でコロナ像を得ることができなかったはずだと、観測ツアーに参加した複数の方からの情報を得ました。この件に関しては「雲のリスクを避けるため、同じ機材を2組用意して、協力者が別の場所で観測した」としていました。

2009年7月22日の皆既日食時は、宮城氏本人は「悪石島で雷雲の下にいた」ものの、2名の協力者が「中国の杭州郊外と鹿児島県の喜界島に出向いて、画像処理に十分な素材を得た」と説明していました。薄雲越しの撮影となった喜界島では、最内部のコロナとプロミネンスの画像を、車で晴れ間を求めて移動した杭州郊外では「雲がちながら青空の隙間から子細なコロナ画像を得た」としていました。

一応、説明の筋は通っています。しかし、今から振り返って考えれば「なぜ、もっと慎重になれなかったのか？」と自戒せねばならない点も多々あります。2008年6月号の表紙に掲載した宮城氏のすばらしいコロナ画像（実際はドルクミューラー氏らによるもの）の“実績”がなければ、“写りすぎている”コロナ画像に対してより強い疑念を抱いたかもしれません。宮城氏は、その協力者グループの中に「画像処理の専門家がいる」と説明していました。沖縄で観光写真を撮ったり、地元のPR誌などから依頼されて写真撮影をこなすかたわら、古い写真をデジタル修復するような仕事も行っており、そこで画像処理の技術を習得したとしていました。

中国の杭州は、皆既帯内の南側で、日食観測地を覆った雨雲の縁にかかっていました。実際に杭州で撮ったというコロナ画像も数多く届いていたことから、晴れ／曇り地域がモザイク状に錯綜していたことも事実です。杭州から遠く内陸に入った一帯では雲の影響の少ないコロナ画像も得られています。「車（タクシー）で走り回ったので正確な撮影地がわからない」と曖昧にしていたことも、好意的に解釈すれば、晴れ間を求めてギリギリまで右往左往したと考えることもできました。

おかしな点がまったく無かったかと問われれば「どこか引っ掛かるものはあった」というのが正直なところです。しかし、その猜疑が「盗用の可能性」にまで深まることはありませんでした。「画像処理に時間がかかった」というコメント付きで、宮城氏からの投稿が届いたのが8月下旬。9月5日発売10月号の表紙として採用するか否かを熟慮している充分な時間的余裕が無く、拙速な判断を下してしまったことも事実です。この浅慮に関して、メールや電話、手紙などにて多くの批判をいただきました。この点に関しては真摯に受け止め、関係者の皆さん、読者の皆さんに重ねてお詫びいたします。

法的措置を準備中

さて、このように、盗用までして名声を得ようとしたことは極めて稀なケースだと考えるべきでしょうか？ それとも、ネットやデジタルツールが画像の盗用や不正な改竄を容易にしたことは確かで、今後は不正行為が行われていないか常に細心の注意を向けるべきなのでしょうか？ ひとつ言えることは、こういった事件があったからといって、天体写真趣味全般に疑念を抱いたり、画像投稿に関して厳しい応募規定を設けることで、趣味世界が萎縮するようなことがあってはならないということです。宮城氏の盗用が明らかになってから4か月、それでも多くの人が天体写真を楽しみ、より美しく、よりすばらしい作品を得る試みを続けています。

当の宮城氏に対しては、これまで「法的措置を検討」するとしていましたが、一歩進んで「法的措置を準備」する段階に入りました。編集部にとっては、得るものが少ない作業ではありますが、信頼関係が破られた場合は断固対処するという姿勢を明確にすることで、いくばくかの再発防止策になるはずだと判断したからです。

■宮城隆史氏による盗用画像を掲載したアストロアーツの刊行物一覧

・星ナビ		
2007年 1 月号	41ページ	2006年11月9日の水星の太陽面通過
2007年 3 月号	1,12,20ページに計4点	C/2006P1マックノート彗星
2007年12月号	14ページに2点	C/2006P1マックノート彗星
	付録カレンダー	2007年8月28日の皆既月食
		C/2006P1マックノート彗星
		2006年11月9日の水星の太陽面通過
2008年 1 月号	18,24ページ	17P/ホームズ彗星
2008年 6 月号	表紙	2006年3月29日の皆既日食
2008年10月号	18ページ	2008年8月1日の皆既日食
2008年12月号	付録カレンダー	17P/ホームズ彗星
		2008年8月17日の部分月食
		2008年8月1日の皆既日食
2009年10月号	表紙	2009年7月22日の皆既日食
・星空年鑑2008	117ページ	2007年8月28日の皆既月食
・皆既日食2009	2-3ページ	2006年3月29日の皆既日食
	5ページ	2008年8月1日の皆既日食
・「ステラナビゲータ8公式ガイドブック活用編」		2006年11月9日の水星の太陽面通過

●「星ナビ」2010年2月号88〜89ページに掲載